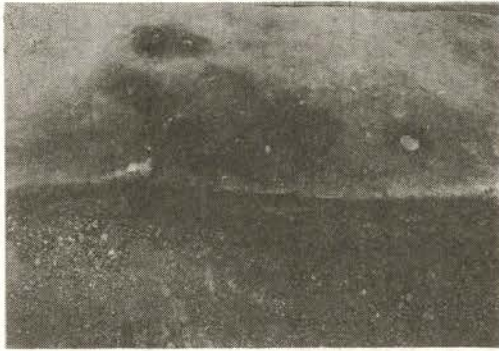
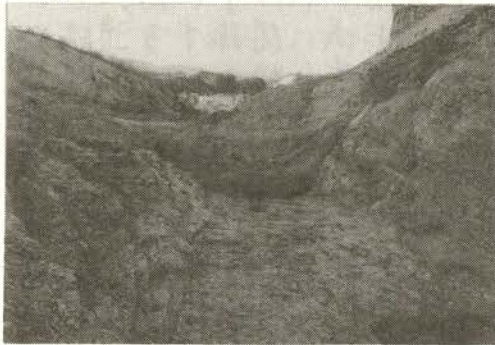




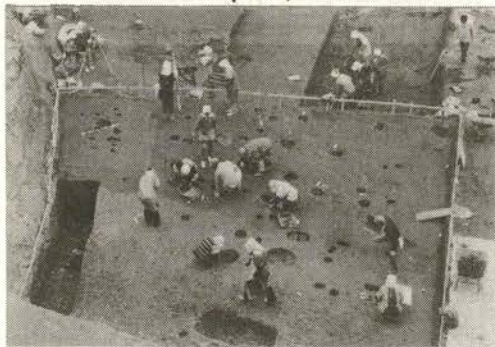
第二図 竪穴住居跡



第三図 カマド跡



第四図 空掘り



第五図 掘立柱建物跡

発見された遺構

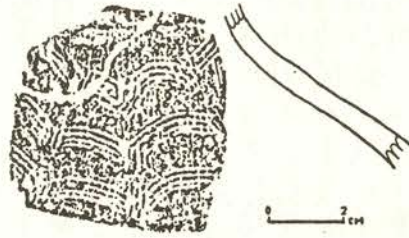
発見された遺構は、室町時代の丘陵地内の丘陵は、室町時代の丘陵地内に、戦国時代以前にも、人間の生活の場として使われていたことがわかりました。その一例が竪穴住居跡でありカマド跡です。

竪穴住居跡は、丘陵尾根付近の南側斜面を掘り込んで造られるものです。一辺4mの正方形を呈する形をとるものと考えられますが、南側半分は削られてあります。北側には、煙出しのための煙道が造られ、カマドの麓口付近が一点出たりして支脚が一点出たりして造られたものと考えられます。

久世原館は、中世の山城跡で、配した方が、お城の学端においた関係が、跡の西側に、思われる川が、その範囲も、この城の周興は、大なりにも、久世原館に、また、多数の出土物のようなかは、検討中です。

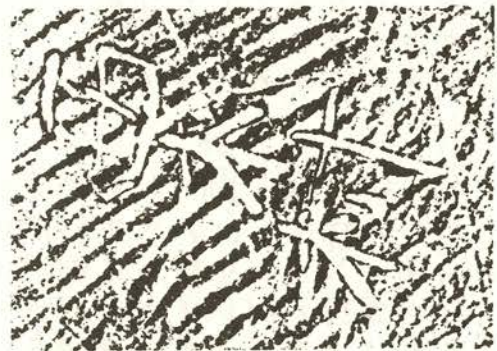
発見された遺物

弥生時代の土器
右側の土器片は、調査範囲の
西端の谷部から出土したもので、
弥生時代の中期ごろに造られた
壺形土器の一部です。文様は、
壺の口縁部に施された文を
用いて描かれています。



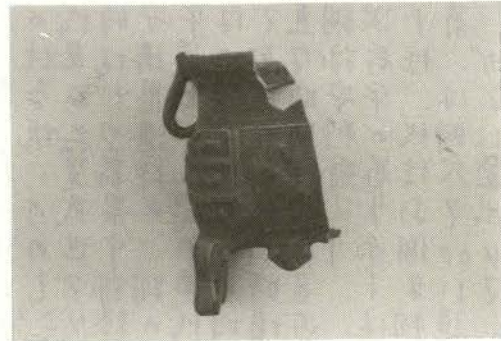
第六図 弥生土器片拓影

「栗村」と刻された須恵器
の資料は、丘陵に点在する
の資材出土点が、表面に
の「栗村」と刻された須恵器
片の壺形跡が、注目を
引く。栗村の遺物から
、非常に珍らしいもの
が、市内で発見された。



第七図 須恵器片刻字銘拓影

香炉 丘陵南斜面裾部の水田
付辺より出土。香炉は、花瓶
・燭台と共に出る。龍泉窯
（中興）の復元を、周辺より
は、鹿の絵を描き、「福」字を
印刻した遺物から、15世紀
土に使用されたものと思われ
ます。



第八図 中国産の香炉

甕 滑石は、現在の愛知県
に相当し、中世の例が「N」
滑石を焼成する時期は、15
水字あり、その出土品
と



第九図 甕の常滑口の部分



第十図 甕の常滑口の部分

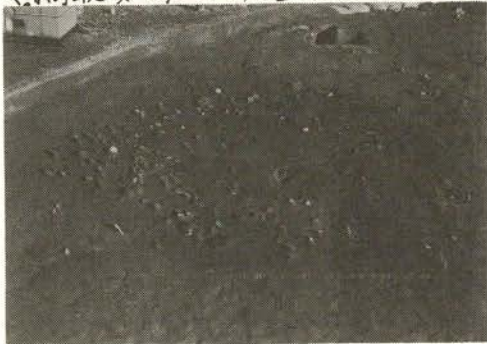
下浜市小名浜に所在し、目の前に「網取貝塚」がある。これは、いわき市内に位置する「網取貝塚」の位置を示す。この遺跡は、公園整備を契機として、昭和58年11月より開始した調査が、今年第5次を迎え、現在第6次調査が進行中です。本貝塚は、今から約5,000年前の縄文時代後期の貝塚（人間や動物を埋葬したり、食べカスを捨てた跡）で、過去に出土した骨角器（鹿の角や骨で造られた釣針や鉗頭）は貴重資料と見なされています。第5次調査で発見された遺構として、縄文時代後期の堅穴住居1棟、埋設土器（地面を掘り込み完全な土器を埋納した特殊な施設）が、直線的に走る溝が1条、また土坑（用途不明の大きな穴）や柱の穴などがあります。台地のほぼ中央より検出された堅穴住居は、長軸4.25m、短軸3.96mのやや楕円形を呈し、その中央部には炉（幼児頭大の礫で円形に囲んだもの）を持っていました。また住居の中には煮たきや貯蔵に使用したと思われる土器も多量出土しています。

また、土器以外の遺物として、石器（石斧、石鏃、石錐、敲石、凹石、石皿）や土製品（土器片鏃、土器片円盤）骨片も出土しています。



第一三図 網取貝塚の位置 (5万分の1図原寸使用)

〈綱取貝塚から発見された竪穴住居跡が掘り上がるまで〉



第一四図 竪穴住居跡を見付ける。



第一七図 竪穴住居跡から炉の跡を見付ける。



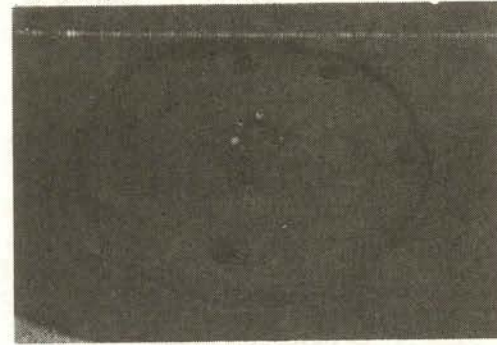
第一五図 竪穴住居跡内を掘る。



第一八図 竪穴住居跡内から見付かった炉の跡。



第一六図 竪穴住居跡内をさらに掘り進む。



第一九図 竪穴住居跡を完全に掘り上げる。

〈お知らせ〉

昭和61年2月2日(日)午前10時より綱取貝塚第5次調査の現地説明会を開催いたしますので、お誘い合わせの上、ご参集下さい。



発行
編集

1986年1月30日

財団法人いわき市教育文化事業団
福島県いわき市平字堂根町1の4 文化センター内
Tel. (0246) 22-5431 内線254